

言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 岡田 泰平

論文題目 関係性の歴史学にむけて：アメリカ植民地期フィリピンの植民地教育をめぐる制度史、史学史、心性史

論文審査委員 イ・ヨンスク教授、糟谷 啓介教授、中野 聡教授

1. 本論文の内容と構成

フィリピンは16世紀半ば以降、スペインの植民地支配のもとにあった。19世紀後半にナショナリズムに基づく政治運動が活発化し、1896年には独立を目指すフィリピン革命が開始された。一方、米西戦争（1898年4月～8月）に勝利したアメリカは、1898年12月のパリ条約でフィリピンの領有権を獲得した。その結果、1899年にフィリピン革命政府とアメリカとの間で戦争が勃発したが、1902年にアメリカはフィリピンを完全に支配下においた。それ以後、1941年の日本軍侵略までの期間が、アメリカによるフィリピン植民地支配の時代である。

このアメリカの植民地支配をどのようにとらえるかは、フィリピンを理解する際の試金石ともなるべき重要な問いである。本論文はこの問題に正面から取り組んだ力作である。著者によれば、フィリピンにおける植民地支配の問題には、〈植民地的近代〉の問題が深く関わっている。つまり、フィリピンでは、近代的な思想・制度・文化がアメリカの植民地支配を経由して根づいたとみなされ、そうだとすると、近代を肯定することと植民地支配を肯定することが等しいものとなる。しかも、アメリカは植民地統治を独立までの準備期間として位置づけていたため、本来であればナショナリズムを通して達成されるはずの政治的独立という目的そのものが、植民地統治の延長となるという逆説さえ生まれる。

著者によれば、このような問題が生じるのは、フィリピンの近代性をめぐる言説空間が植民地教育によって満たされていたからである。そこで著者は次の一連の問いを設定して、この問題を解明しようとする。すなわち、植民地支配は教育をどのように制度化したか、植民地教育を肯定的に語る定型的な歴史記述がどのようにして生じてきたのか、植民地教育制度に関わった人々にはどのような意識があったのか、そして、教育を受けた体験がどのように記憶され、それが基礎になってどのような歴史像が提示されてきたのか、である。副題の「制度史、史学史、心性史」は、これらの側面に対応している。

本論文の構成は以下の通りである。

第1章 先行研究と方法論

第2章 中央集権制の構築と行政進歩主義

第3章 教育行政知の成立

第4章 史学史：一次資料

第5章 史学史：二次資料

| | |
|-------|----------------|
| 第 6 章 | 教育職の構成 |
| 第 7 章 | 生活、心性、学校文化 |
| 第 8 章 | 1930 年学校ストライキ論 |
| 第 9 章 | 結論 |
| | 添付資料 |
| | 参考文献 |

2. 本論文の概要

第 1 章では、アメリカによる植民地支配と植民地教育をめぐる先行研究が検討される。そこで明らかにされるのが、研究上の実証主義に内在する問題である。実証主義の立場からは、統治者が残した資料だけが学問的に信頼できる客観性を備えているとされる。それらの資料に基づいて歴史を書くと、植民地官僚の視点が研究者の記述に入り込んで、植民地支配への肯定的な見方が自然と導きだされる。このような実証主義を批判する研究者のなかには、しばしば客観性に欠けるとされる種類の民衆の伝承を歴史記述のなかに取り込む者もいる。しかし、本論文で著者はそうした方向に直ちに向かうことはせず、従来の資料を新たな視点から読み直すこと、新たな資料を発掘することに努めている。

第 2 章、第 3 章は「制度史」にあたる。著者は教育局の残した膨大な資料を詳細に検討することで、アメリカが作り上げようとした近代的教育組織のどこに問題があったかを的確に指摘している。著者によれば、フィリピンにおける教育制度はきわめて中央集権的な性格をもち、行政進歩主義の名のもとに徹底した階級的再生産と明確な専門家支配を目指していた。その点でアメリカ本国の教育制度とは異なる。また、フィリピンの教育局では、教育効果が数値によって測定される傾向が非常に強かったため、教育体制そのものの官僚化と硬直化が生まれた。さらに、教育を支えるのに十分な財政基盤がなく、とくに地方の小学校では中央からの財政的援助は頼りにできなかった。そのことが植民地教育を常に不安定な状態におき、社会への十分な浸透を不可能にしたと著者は結論づけている。

第 4 章、第 5 章は「史学史」にあたる。第 4 章では、フィリピンに派遣されたアメリカ人教員の残した多数の回想録を読み解くことで、植民地教育にたずさわった教員自身がどのような態度でフィリピン社会に臨んでいたかを明らかにしている。回想録に見られるフィリピン観は多様であり、ときにはまったく正反対の見解もある。しかし、大きな流れとしては、アメリカは教育を通してフィリピンに恩恵をあたえており、それによってフィリピン人は初めて独立国家を担いうる国民になりうるという考え方が支配的になった。第 5 章では、植民地期を肯定的に語る言説が、独立後のフィリピン研究のなかでどのように作り上げられていったかが論じられる。ここで取り上げられるのが、フィリピン社会に蔓延するとされる首領支配、いわゆるカシキズムの問題である。たとえば、人的隷属を強制する封建的なカシケ (cacique) がフィリピン社会を支配しているために、フィリピンの近代化と社会的発展が遅れているとされる。この背景にあるのは、アメリカとフィリピンの対立を民主主義や社会的進歩を軸にして二分法的にとらえる観点である。

著者はこうした二分法的見方を批判するために、第 6 章では植民地教育のなかでアメリカ人とフィリピン人がどのような関係性を構築していたのかが論じられる。教育の現場で、アメリカ人はフィリピン人に一方的な恩恵をあたえているとされた。アメリカ人教員には大きな特権があたえられていたが、そのことはフィリピン人教員との格差を解消する方向を生み出すよりは、むしろ教員職への就職によるキャリア獲得の動機としてはたらいだ。第 7 章では、植民地教育のもたらした学校文化が周囲の社会にどのような影響をあたえて、近代化の欲求を生み出すにいたったかが論じられる。著者によれば、フィリピン人教員は、学歴や職歴という植民地統治が公式に認めた社会上昇のはしごを昇ろうとした人たちなのであり、その意味でフィリピン社会を先導するモデルとして機能した。こうして植民地教育を通して、恩恵をあたえるアメリカ人と感謝するフィリピン人という「情念的紐帯」が生み出されまでになった。

第 8 章では、1930 年 2 月から 3 月にかけてマニラの高校で起こった「学校ストライキ」がとりあげられる。ストライキのきっかけはあるアメリカ人教員のフィリピン人に対する差別的発言であった。学生たちは授業ボイコットなどで抵抗するが、最終的には学校当局の懐柔によりストライキは終息に向かう。著者は当時の新聞記事をはじめとする資料を発掘して、この学校ストライキの経過をつぶさに再現している。この学校ストライキが重要であるのは、アメリカ人とフィリピン人の間の「情念的紐帯」が破綻した珍しい例だからである。ところが、アメリカ植民地支配に批判的なナショナリズムの立場で書かれた歴史書には、この事件を記しているものがない。それは、このストライキが 1930 年代のナショナリズムに典型的であった運動形態——ひとつはエリート主導のもの、もうひとつは大衆運動的なもの——のどちらにも当てはまらなかったからである。この著者の指摘はたいへん興味深く、研究のさらなる発展の萌芽とみなすことができる。

結論では、現在のフィリピン社会を理解するためには、アメリカ植民地期についての明確な認識が必要であることを指摘して、論文全体の議論を総合的視点からまとめている。

3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果は以下のようにまとめられる。

第一に、フィリピンにおける「植民地的近代」の根底には植民地教育の問題が横たわっていることを明らかにし、大量の資料を駆使してその複雑な様相を見事に描き切ったことである。植民地の教育体験にはある種の両義性が内包されており、植民地教育制度の下で近代性に触れざるをえないフィリピン人の葛藤そのものに着目しなければならないという著者の指摘は、「植民地的近代」を理解する上できわめて重要なものであるといえる。本論文が充実しているのは、植民地教育そのものの複雑な多面性を丁寧に解きほぐし、その歴史的意味を明らかにしている点にある。

第二に、アメリカとフィリピンの植民地関係史において、フィリピンにおいて、宗主国のアメリカがもたらした近代とは異なる「対抗的近代」がなぜ構築され得なかったのかという問いに、正面から取り組んでいることである。この問いはアメリカ・フィリピン植民

地関係史における最大の問いとすることができるし、植民地教育史を論文のテーマとして設定したのは、この問いに答えるうえでもっとも正攻法な取り組みと言える。

個々の章について言えば、第2章・第3章に見られる植民地教育制度の発展史や中央集権制の分析は、その史料水準・分析視角において、先行研究にはない水準に達している。また、制度発展を数値化する植民地行政知のあり方や、中央集権的な教育制度を支えた行政進歩主義の分析はきわめて綿密である。さらに、植民地期の資料に依拠する実証主義的な植民地史研究が植民地統治の「成功言説」に呪縛されざるをえないという循環的な構造を明晰に描き出している。

第4章・第5章は、「恩恵」としての植民地教育、教育改革の「成功」と「失敗」、その理由に関する植民地言説および研究史の分析を行うことで、歴史意識の考察という深いレベルに達している。また、フィリピン史研究を中心に幅広い文献が適確に参照されており、分析方法も妥当である。

第6章・第7章・第8章は、「恩恵」言説にもとづくアメリカとフィリピンの友好関係、著者の言葉に従えば「情念的紐帯」が維持された要因を、教員・生徒双方の歴史経験と学校文化という現場から分析した意欲的な試みである。教員のキャリア形成や教員意識を分析した第6章は、これまでに使用されたことのない史料を利用して、独創性の高い議論を展開している。1930年学校ストライキ事件とその忘却を扱った第8章も、未踏の研究業績として高く評価できる。

一方、問題点としては、以下の点が指摘できる。

第一に、序論で展開した植民地教育比較史の視点に、結論でもう一度立ち返ったとき、フィリピンにおいて「対抗的近代」が構築されなかった理由や意味をどのように語ることができるか、という問題が残る。法的規範や強制力（暴力）によって言説が規制されていたとすると、他の帝国主義支配、たとえば日本による朝鮮支配などとの比較の問題も出てくる。キャリア・インセンティブ、恩恵言説などの要因と実力・暴力・規範といった要因の間の関係についての総合的な評価が結論で欲しかった。

第二に、植民地期公定ナショナリズム（フィリピン議会エリートの独立運動）との関係史的分析が欲しかった。学校現場において、革命、独立、独立後の将来像がどのように語られていたのか、それがエリート主導の独立運動とどのような関係性を持っていたのかについて、もう少し突っ込んだ分析があってもよかったように思われる。

細かな点であるが、歴史家としてのイレートの評価については、さらに検討を加えることが望ましい。イレートを「ナショナリスト史学」と同列視するのはやや問題がある。また、学校文化については、社会史の分野の史料をもう少し補って論じれば、さらに広がりのある議論が展開できたのではないかと思われる。

しかし、こうした問題点があるにせよ、本論文が優れた業績であることに変わりはない。鮮明な問題意識、しっかりした理論的枠組み、資料の正確な分析、緻密な議論の展開など、いずれをとってみてもそこに研究者としての優れた能力と資質を認めることができる。本論文はA4版で546ページにおよぶ大作であるが、水増ししたような箇所はまったく見られ

ず、一貫して充実した議論が展開されている。また、ここで初めて紹介された資料や文献も多く含まれており、その点からも高く評価できる業績である。総合的に見て、第一級の学問的価値を有する力作であることは間違いない。

4. 結論

以上の審査結果に鑑み、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第5条1項の規定により一橋大学博士(学術)の学位を受けるに値するものと判断する。

最終試験結果の要旨

平成 20 年 6 月 11 日

受験者 岡田泰平

最終試験委員 イ ヨンスク、糟谷 啓介、中野 聡

平成 20 年 5 月 23 日、学位請求論文提出者 岡田泰平氏の論文および関連分野について、本学学位規則第 8 条第 1 項に定める最終試験を行なった。本試験において、審査員が提出論文「関係性の歴史学にむけて：アメリカ植民地期フィリピンの植民地教育をめぐる制度史、史学史、心性史」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、岡田氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって審査員一同は、岡田泰平氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有することを認定し、最終試験での合格を判定した。